

「まつりごと ～天皇と政治の関わりの歴史②」

鎌倉時代～南北朝時代

黒田裕樹（歴史講演家／大阪府内の高校社会科教師）

1. 源氏の暗転と北条氏の台頭

前回（第72回）述べたとおり、建久（けんきゅう）3（1192）年に朝廷から征夷大將軍（せいいたいしやうぐん）に任じられて鎌倉幕府を開いた源頼朝（みなもとのよりとも）でしたが、いくら朝廷の公認を受けているとはいえ、天皇や朝廷を差し置いて政治を行うことに対する「後ろめたさ」を感じていました。

また、自分の没後も源氏が將軍として政治を行うための「後ろ盾（だて）」が欲しいとも考えていました。政権を握るまでは夢中で走ってきた頼朝もやはり人の親であり、また自己の家系の繁栄（はんえい）を望んでいたのです。

建久6（1195）年、頼朝は東大寺の再建供養に出席した際に京へ向かい、娘を後鳥羽（ごとは）天皇の妃（きさき）にしようとしてしました。頼朝にしてみれば、自分が朝廷の縁続きとなることで後ろめたさを解消するとともに、もし娘に皇子が生まれて、将来天皇に即位することがあれば、源氏政権の強力な後ろ盾になると考えたのですが、これは絶対にやってはいけない「禁じ手」でした。

「自分の娘を天皇の妃として、生まれた皇子が天皇に即位して自分は外戚（がいせき、母方の親戚のこと）となる」。この流れはかつての平氏政権と全く同じであり、源氏が貴族化すると同時に、せっかく武士が手に入れた政治の実権を再び朝廷に奪われる道を拓（ひら）くと思われても仕方ありません。

結果的に頼朝の思惑は失敗に終わりましたが、鎌倉の武士団からすれば、頼朝の行為は「重大な裏切り」であり、到底許されないものでした。

その後の頼朝は、落馬事故が原因で建久10（1199）年旧暦1月に死亡したことになっていますが、いかに戦争が不得意であったとはいえ、武家の棟梁（とうりょう）が生命に関わる落馬事故を起こすとは思えません。史料にも頼朝の死の前後の記載があやふやになっているなど、詳しい死因は現在も分かっていません。

ただ、はっきり言えることは、頼朝の死後に源氏の運命が一気に暗転したということです。平氏の滅亡後に源義経（みなもとのよしつね）が歴史の表舞台から退場したように、征夷大將軍となって幕府を開いた段階で、頼朝並びに源氏の役割は終わりを告げていたのです。

頼朝の死後、子の源頼家(みなものよりいえ)が後を継いで2代将軍となりましたが、父並みの器量は望むべくもなく、いつしか幕府では、頼朝の側近や有力御家人からなる13人の合議制による政治が主流となりました。その中からやがて頭角を現したのが、頼朝の舅(しゅうと、妻の父のこと)である北条時政(ほうじょうときまさ)や、頼朝の妻の北条政子(ほうじょうまさこ)を中心とする北条氏でした。

頼家は有力御家人である比企能員(ひきよしかず)の娘を妻としており、頼家は自分の後ろ盾として比企氏を頼りとしていました。しかし、頼家と比企氏の接近に危機を感じた北条氏は、建仁(けんんにん)3(1203)年に比企能員を滅ぼし、返す刀で頼家を伊豆の修善寺(しゅぜんじ)に幽閉(ゆうへい、閉じ込めること)したうえで暗殺しました。

北条時政は頼家の弟である源実朝(みなとものさねとも)を3代将軍に就任させると、自分は政所(まんどころ、一般政務や財政事務を行う職制のこと)の別当となりました。さらに、後に時政の後を継いだ子の北条義時(ほうじょうよしとき)は、建暦(けんりゃく)3(1213)年に侍所(さむらいどころ、軍事や警察組織をつかさどる職制のこと)の別当だった和田義盛(わだよしもり)を滅ぼし、自身が侍所の別当も兼ねることになりました。

これ以降、幕府の主要機関である侍所と政所の別当を北条氏が代々世襲(せしゅう、子孫が代々受け継いでいくこと)するようになり、その地位は「執権(しつけん)」と呼ばれ、名ばかりの将軍と化した源氏に代わって、北条氏が幕府の実権を握るようになりました。

一方その頃、幕府の成立と勢力の拡大という厳しい現実を見せ付けられていた京都の朝廷では「治天(ちてん)の君(きみ)」の後鳥羽上皇が中心となられて政治の立て直しが行われていました。上皇は分散していた広大な皇室領の荘園を手中におさめられるとともに、朝廷の武力増強の一環として新たに「西面の武士」を置かれるなど、朝廷の権威の回復を目指されました。

なお「西面の武士」は、9世紀末に設けられた「滝口(たきぐち)の武士」や、11世紀の「北面の武士」と非常に間違えやすいので注意が必要です。

これに対して、政治の実権を北条氏に奪われた将軍の源実朝は、京都の公家(くげ)から妻をもらった影響もあって、和歌を趣味として日々を過ごしていました。これに目をつけられた後鳥羽上皇は、幕府を事実上の朝廷の支配下にしようと計画されました。

しかし、建保(けんぼう)7(1219)年旧暦1月に、実朝は鎌倉の鶴岡八幡宮(つるがおかはちまんぐう)で、頼家の遺児であった僧の公暁(くぎょう)に暗殺されてしまいました。この直後に公暁も殺されたことによって、頼朝以来の源氏の血はついに絶えてしまったのです。

ちなみに実朝を暗殺したとされる公暁ですが、暗殺の現場で「我こそは公暁なり」と叫んだという記録が残っているだけで、その後にすぐ討ち取られていることから、本物の公暁だったかどうかという確証がありません。実朝の暗殺で、いったい誰が一番得をしたことになるのでしょうか。

さて、源氏の血統が途絶えたとはいえ、将軍が空位のままではさすがにまずいので、北条氏は京都から皇族を将軍に迎えようとして朝廷と交渉しました。しかし、実朝の暗殺でご自身のお考えが果

たされなくなった後鳥羽上皇は許可されることなく、代わりに頼朝の遠縁(とおえん)にあたる、わずか2歳の藤原頼経(ふじわらのよりつね)を将軍の後継として迎えました。なお、こうした藤原氏からの将軍のことを「摂家(せっけ)将軍」といいます。

期待されていた実朝の暗殺に気落ちされていた後鳥羽上皇でしたが、源氏の血が絶え、摂家将軍を迎えるという不安定な状態にある現在こそ幕府を倒す好機を考えられ、承久(じょうきゅう)3(1221)年に北条義時追討の院宣(いんせん、上皇からの命令書のこと)を出されました。

関東の御家人は自身たちが朝敵(ちょうてき、朝廷にそむく敵のこと)となったことで動揺(どうよう)しましたが、ここで一人の女性が一世一代の演説をしたことによって、逆に結束を固めることになりました。

「皆さん、心を一つにして聞きなさい。これが最後の言葉です。今は亡き頼朝殿から皆さんが受けた恩義は山よりも高く、海よりも深いはずです。今私たちは、不正な命令によって反逆者の汚名を着せられたことで、つぶされようとしています。武士の名誉を重んじるならば、断固として戦うべきです！」。

頼朝の未亡人であり、息子二人を失った後も北条氏を支え続けた「尼(あま)将軍」北条政子の名演説に、頼朝以前の武士の悲惨な待遇を思い出した御家人は、涙ながらに団結して朝廷と戦うことを決意しました。

北条政子の名演説に勇氣百倍の東国武士は、北条義時の子である北条泰時(ほうじょうやすとき)を中心とする大軍で京へ攻めのぼり、朝廷側は圧倒的な幕府の武力の前に敗退しました。なお、当時の年号からこの戦いを「承久の乱」もしくは「承久の変」といいます。

乱の後、後鳥羽上皇と子の土御門(つちみかど)上皇並びに順徳(じゅんとく)上皇は、北条氏によってそれぞれ隠岐(おき)、土佐(とさ)、佐渡(さど)へと流されました。上皇(天皇)が武士によって処罰を受けるのは初めてのことであり、朝廷は大きな衝撃(しょうげき)を受けました。また順徳上皇の子で当時4歳の仲恭(ちゅうきょう)天皇がご即位後わずか78日で退位させられ、新たに後堀河(ごほりかわ)天皇が即位されました。

ちなみに、在位期間の短かった仲恭天皇はご即位が認められず、長らく「九条廢帝(くじょうはいてい)」と呼ばれました。仲恭天皇と追号(ついごう)されたのは明治になってからのことです。

また、後堀河天皇はご即位時に10歳と若かったため、父で出家されていた行助法親王(ぎょうじよほうしんのう)が還俗(げんぞく、一度出家した者がもとの俗人に戻る)こと)されて上皇となられ、院政を行われましたが、天皇ご即位の経験のない上皇は前代未聞のことでした。なお、上皇は崩御(ほうぎよ、天皇・皇后・皇太后・太皇太后がお亡くなりになること)後に後高倉院(ごたかくらいん)と追号されています。

幕府は、乱後の京都に六波羅探題(ろくはらたんたい)を置き、朝廷を監視するとともに西国の御家人の裁判や軍事などの統轄(とうかつ、多くの人や機関を一つにまとめて管轄すること)にあたらせる一方、上皇の味方をした公家や武士の所領の3,000余か所を没収し、戦功のあった御家人らをその地の地頭に任命し

ました。

なお、乱後の地頭は新たな給分(きゅうぶん、給付される領地や米、銭などのこと)を定めた新補率法(しんぼりつぽう)に基づく「新補(しんぼ)地頭」と呼ばれ、従来の地頭は「本補(ほんぼ)地頭」と呼ばれました。これらによって、従来は東国が中心だった幕府の勢力範囲は畿内(きない)や西国にも及び、また幕府が朝廷よりも優位に立つことで、皇位の継承や朝廷の政治にも関わるようになりました。

承久の乱の後、鎌倉幕府は3代執権の北条泰時の時代に発展期を迎えました。泰時は執権の補佐役としての連署(れんしよ)を設置して、北条氏の一族の有力者を任命しました。また、有力な御家人などの11人を評定衆(ひょうじょうしゅう)に選んで、合議制によって政務の処理や裁判にあたらせました。

また、泰時は貞永(じょうえい)元(1232)年に51か条からなる御成敗式目(ごせいばいしきもく)を制定しました。御成敗式目は我が国最初の武家法であり、頼朝以来の先例を基本とした武家の慣習や道理を成文化したものでした。

内容としては、守護や地頭の任務や権限を定めたり、御家人の権利義務や所領の相続の規定、御家人同士や御家人と荘園領主との間の紛争を処理する基準などが定められたりしました。

式目は、従来の律令(りつりょう)に比べて非常に平易(へいい)な文章で書かれており、内容も実用的なものが多く、後世にまで大きな影響を与えました。ただし、式目の適用は武家社会に限られており、朝廷の支配下では律令の後身(こうしん、もとの形から変わって現在の姿になったもの)である公家法(くげほう)が、荘園領主の支配下では本所法(ほんじょほう)が引き続き効力を持っていました。

なお、御成敗式目は当時の年号にちなんで「貞永式目」とも呼ばれており、また式目が51か条となったのは、聖徳太子(しょうとくたいし)の憲法十七条の3倍が由来とされています。

北条泰時による執権政治は、孫の5代執権である北条時頼(ほうじょうときより)に引き継がれました。時頼が執権に就任した直後の寛元(かんげん)4(1246)年に前将軍の藤原頼経が反乱を起こしましたが、これを鎮圧した時頼は、頼経を京都へ送り返しました。

また、翌宝治(ほうじ)元(1247)年には有力御家人の三浦泰村(みうらやすむら)を滅ぼし、北条氏の勢力の拡大に成功しました。三浦泰村との戦いは、当時の年号から「宝治合戦(かつせん)」と呼ばれています。さらに建長(けんちょう)4(1252)年には5代将軍の藤原頼嗣(ふじわらのよりつぐ)を京都へ追放し、代わりに後嵯峨(ごさが)上皇の皇子である宗尊(むねたか)親王を6代将軍として迎えました。これ以降、名目だけの「皇族将軍」が幕府滅亡まで4代続くこととなります。

一方、時頼は当時増加していた御家人達の所領をめぐる訴訟(そしょう)を迅速(じんそく)に処理するため、建長元(1249)年に評定衆の会議である評定のもとに引付(ひきつけ)という役職を新たに設けるとともに、引付衆(ひきつけしゅう)を任命して評定衆を補佐させました。

なお、幕府の求めによって、朝廷でも同時期に後嵯峨上皇によって院評定衆(いんのひょうじょうしゅう)が

置かれましたが、院評定衆は幕府の承認を得て任命されたため、結果的に幕府が朝廷の政治に深く関わるようになりました。

康元(こうげん)元(1256)年、時頼は病気のため30歳で執権の地位を一族の北条長時(ほうじょうながとき)に譲って出家しましたが、政治の実権は握り続けました。

時頼のように北条氏の嫡流(ちやくりゅう、正当な血筋を持つ家柄のこと)の当主である「得宗(とくそう)」が政治を指導することを「得宗専制政治」といい、鎌倉幕府はこの頃に全盛期を迎えました。

ところで、時頼の頃の武士の様子分かる有名な謡曲(ようきょく)「鉢(はち)の木」を皆さんはご存知でしょうか。なお、謡曲とは能(のう)の脚本、またはそれに節(ふし)をつけて謡(うた)うことです。

上野国佐野(こうずけのくにさの、現在の群馬県高崎市)に住む貧しい老いた武士である佐野源左衛門常世(さのげんざえもんつねよ)の家に、ある雪の夜、旅の僧が一夜の宿を求めました。僧の話を知ると、信濃(しなの、現在の長野県)から鎌倉へ向かおうと旅をしてきたのですが、大雪のために先へ進むことができなくなってしまったらしいのです。

しかし、源左衛門は自分が貧しいために、旅人をもてなそうにも何もしてやることはできないと思って、一度はその僧の願いを断りましたが、雪の中で難儀(なんぎ)しているのを見捨てることもできず、結局は泊めることにしました。

源左衛門は旅の僧のために粟飯(あわめし)を出すなどの心ばかりのもてなしをしましたが、夜が更けて寒さが身にしみる頃には、旅の僧に暖をとってもらうための薪(まき)さえなくなってしまいました。そこで源左衛門は、大事に育てていた盆栽(ぼんさい)の「梅」「松」「桜」の鉢(はち)の木を惜しげもなく切って、囲炉裏(いろり)にくべました。

源左衛門のもてなしに感激した旅の僧は、さぞかし名のある武士ではないかと思って源左衛門の身の上をたずねました。

「私は佐野源左衛門常世と申します。かつてはこのあたり一帯を治めておりましたが、一族の者に領地を奪われ、今はご覧のとおり落ちぶれてしまいました」。

源左衛門の話を知っていた旅の僧が周囲を見渡すと、立てかけられた大きな薙刀(なぎなた)や、鎧(よろい)が入っていると思われる大きな箱を見つけました。僧の視線に気がついた源左衛門は、力を込めて話を続けました。

「しかしながら、我が身がいかに落ちぶれたとはいえ、この源左衛門は鎌倉殿の御家人。いざ鎌倉に一大事があらば、古ぼけた鎧であってもこれを身につけ、さびたといえどもあの薙刀を持ち、やせ馬にむち打って、誰よりも早く鎌倉に駆け付けて、生命を懸けて戦うつもりでござる！」

源左衛門の見事な覚悟ぶりに、旅の僧は黙って何度もうなずきました。そして翌朝、旅の僧は丁重(ていじゆう)

いちょう)にお礼を述べて、源左衛門の家から旅立ちました。

時は流れ、春になったある日のこと、幕府から「急ぎ鎌倉に集まれ」という命令が関東の御家人たちに向けて発せられました。源左衛門は真っ先に鎌倉へ駆け付けましたが、そのみすぼらしい姿は他の武士の失笑を買いました。そんな源左衛門が幕府首脳から呼び出しを受けて前へ進むと、そこで待っていたのは、何とあの時の旅の僧でした。

「源左衛門、よくぞ参った。いつぞやの大雪の日には大変世話になったな」。そう話しかけてきた旅の僧は、実は鎌倉幕府の最高実力者である、前の執権の北条時頼だったので。

時頼は源左衛門の忠義を称(たた)えるとともに、奪われていた彼の領地を取り戻しただけでなく、梅田(うめだ)・松井田(まついだ)・桜井(さくらい)という鉢の木にちなんだ 3 か所の領地を新たに与えたということです。

以上の話は時頼よりも後の時代につくられたとされており、創作の可能性が高いですが、たとえ「つくり話」であったとしても、時頼であれば似たような行動をしてもおかしくない当時の人々に思われ続けたからこそ、長く語り継がれてきたのでしょう。また、鎌倉時代の「御恩(ごおん)と奉公」の仕組みや「一所懸命」の思いなどがよく分かる伝説でもあります。

2. 元寇とその影響

かつて満州からモンゴル高原東部まで及ぶ帝国を築いた遼(りょう)は、1125年に女真族(じょしんぞく)が樹立した金(きん)によって滅ぼされました。金はその後も領土を拡大し続け、1127年にはチャイナの北宋(ほうそう)をも滅ぼしました。宋の皇帝の一族は南方へ逃れて南宋(なんそう)を興し、以後は金と南宋という二つの王朝が中国大陸を支配するようになりました。

その後、我が国で鎌倉幕府が成立して間もない13世紀始め頃、大陸で金の支配下にあったモンゴル高原にテムジンがあらわれると、モンゴルは「チンギス=ハーン」と称したテムジンによって統一されました。チンギス=ハーンはその後も征服を続け、中央アジアから南ロシアに至る広大な地域を領有しました。

チンギス=ハーンの後継者であるオゴダイ=ハーンは遠くヨーロッパまで征服するとともに、1234年には金を滅ぼし、アジアから東ヨーロッパにまたがる大帝国を建設しました。チンギス=ハーンの孫のフビライ=ハーンは、チャイナを支配するために都を大都(だいと、現在の北京)に定めて国号を元と改め、朝鮮半島の高麗(こうらい)を服属させました。

要するに、中国大陸に広大な領土を持つ帝国が現れ、かつ朝鮮半島がその支配下に置かれたことによって、周りを海で囲まれた我が国といえども、他国からの侵略にさらされる危険性が高まったのです。そして、文永(ぶんえい)5(1268)年旧暦1月には、高麗の使者がフビライの国書をもたらし、我が国に対して武力を背景に服属を要求してきました。つまり「日本よ、自分の家来になれ！」と命令したわけです。

元の使者に対して、鎌倉幕府は黙って元の服属国となることを受け入れるか、あるいは元との戦いを覚悟してでも服属を拒否するかを選択を迫られたわけですが、幕府には初めから「元には服属しない」という決断しか有り得ませんでした。なぜそういえるのでしょうか。

鎌倉幕府は、そもそも武力によって他の勢力を自分の支配下に置くことで成立していました。そんな幕府が、いかに強敵だからといって元に服属してその軍門に下ったとすれば、幕府以外の組織や武士団にはどのように映るでしょうか。

「鎌倉幕府は敵に対して尻尾(しっぽ)を巻いて逃げた」ということになり、幕府のメンツが丸潰れになるどころか、権威が失墜(しっつい)して以後の支配に悪影響を及ぼすことは間違いありません。さらに付け加えれば、そもそも幕府の「征夷大將軍(せいいたいしょうぐん)」が外国に服属することを選択すれば、その瞬間に將軍の権威は消失してしまうのです。

当時の鎌倉幕府の執権は、同年旧暦3月に就任したばかりの北条時宗(ほうじょうときむね)でした。このとき時宗はまだ18歳という若さでしたが、幕府の重臣たちと協議を重ねた末、国書に対する返書を黙殺するとともに、元の来襲を予想して、九州の御家人に異国警固番役(いこくけいごばんやく)を課し、沿岸の警備を強化しました。

さて、再三送った使者を追い返されて激怒したフビライは、文永11(1274)年旧暦10月に高麗兵を併せた約3万の兵力で壱岐(いき)・対馬(つしま)の両島を占領した後、ついに博多湾に上陸しました。幕府も九州地方の御家人を中心に彼らと応戦しましたが、それまでの一騎討ちを中心とし、名乗りをあげてから攻め込む日本式の戦闘方法が元軍の集団戦法には通用せず、いきなり大量の矢を浴びてしまいました。

この他にも、いわゆる「てつほう」と呼ばれた爆発物に馬も武士も大いに戸惑うなど、元軍流の戦闘に不慣れた幕府軍は苦戦を強いられました。亡国の危機に際して、懸命に戦い続けた幕府軍の武力は決して元軍に引けを取らず、逆に彼らを追いつめることになるのです。

それまで圧倒的な武力で他国を屈服させ続けてきた元軍でしたが、幕府軍による彼らがこれまでに受けたことがないような激しい抵抗は、元軍に大きな被害をもたらすとともに、彼らを恐怖に陥(おと)いれました。

やがて元軍は沖合に船を避難させると、何とそのまま高麗まで退却してしまったのです。この戦いは、当時の年号から「文永の役(えき)」と呼ばれています。

なお、これまでの通説では、季節外れの暴風が吹き荒れたことで元軍が退却したとされてきましたが、実際には、意外な抵抗を受けて怖くなった元軍や高麗軍が逃げ帰ったというのが真相であり、日本側の記録にも「朝になったら敵船も敵兵もきれいさっぱり見あたらなくなったので驚いた」と残されています。

翌建治(けんじ)元(1275)年、フビライは様子を見るために我が国に再び使者を送りましたが、幕府は使者の首をはねて外交拒絶の意思を明らかにしました。これは、以前に元が送った使者が我が国に長期間滞在したことで、スパイ活動をしていたのではないかと疑われたからでもあります。

元との再戦を決意した北条時宗は、異国警固番役を強化するとともに、全国の御家人に命じて博多湾沿いに石造の防塁である石塁を築き、元の再来襲に備えました。

我が国の強硬な姿勢に対して、再び日本を攻める決断をしたフビライは、1279年に南宋を滅ぼすと、返す刀で弘安(こうあん)4(1281)年の旧暦5月から6月にかけて、兵数約14万人という前回の4倍以上の兵を、二手に分けて再び博多湾に差し向けました。

軍船約4,000隻(せき)の大船軍団が博多湾を覆(おお)い尽くすかのように来襲し、それこそ黒雲のような矢の雨を降らせてきましたが、防備力の高い石塁が存在していたことや、文永の役を経て相手の戦法を理解していた幕府軍が冷静に戦ったこともあって、元軍はなかなか上陸ができませんでした。

それでも、元軍の一部が幕府軍の守備の及ばない搦(から)め手から上陸し、博多の町に侵入して乱暴狼藉(らんぼうろうぜき)を働きましたが、すぐに幕府軍に見つかって、街中で激しい戦いを繰り広げました。

一方の幕府軍も、夜になって周囲が真っ暗になると、夜陰にまぎれて敵船に乗りこんで火をつけ、あわてた敵兵を討ち取るといったゲリラ戦を敢行するなど健闘を重ね、戦いは膠着(こうちやく)状態となりました。

そして旧暦7月1日(現在の暦で8月16日)、北九州方面を襲った大暴風雨によって、元軍の乗っていた軍船がことごとく破壊され、多くの兵が亡くなりました。戦意を喪失した元軍は高麗へと引き上げ、国内に残った兵も幕府軍の掃討戦によって討ち取られました。元軍との二度目のこの戦いは、当時の年号から「弘安の役」といい、文永の役とともに「元寇(げんこう)」と呼ばれています。

さて、外国による本格的な来襲という有史以来最大の危機を乗り越えた我が国でしたが、その背景に勇敢に戦った鎌倉武士の大きな功績があったのはまぎれもない事実です。元寇の時期がたまたま武家政権の鎌倉幕府の支配であったことも幸いしましたが、我が国の勝利には、それ以外にも様々な理由がありました。

まず元軍といっても、その大半が征服した異民族の連合軍であり、各人の戦意が乏(とぼ)しいのみならず、意志の疎通が十分に行われなかったという一面がありました。また、突貫工事で高麗に造らせた船は決して丈夫ではなく、しばしば転覆(てんぷく)の憂き目にあったほか、弘安の役の際の大暴風雨で、多くの軍船が破壊されるとともに、数えきれないほどの兵の生命を奪ったとされています。

また、大陸を縦横無尽に駆け回る陸戦と違って、元軍にとっては不慣れな海戦であったことや、我が国の風土に合わない兵士が次々と疫病(えきびょう)で倒れるという不利もありました。

さらに何よりも元軍を悩ませたのは、それまでに他国を征服した際に大いに利用してきた騎馬軍団が、元寇の際には全くといっていいほど使えなかったことでした。

騎馬軍団を構成する馬は非常に神経質な動物であり、海を渡って攻め寄せる際に、船に乗せることが大変難しかったことで、元軍は得意の騎馬をほとんど使わずに我が国と戦わなければならない、という大きな不利を当初から抱えていたのです。

一方、元の来襲という国難に際して、特に弘安の役の折に暴風雨が発生したことで「我が国は神風に守られている」とする神国思想がこの後に主流となっていきました。この思想は、やがて我が国に対して大きな影響をもたらすこととなります。

さて、あきらめきれないフビライは、我が国に対して三度目の来襲を計画しましたが、諸般の事情で中止となり、元はその後二度と我が国を攻めることができませんでした。一方、我が国は九州沿岸の警戒体制をゆるめず、元寇を機会に幕府の影響力を西国にも広めました。永仁(えいにん)元(1293)年には「鎮西探題(ちんぜいたんだい)」を設けて、北条氏一門を派遣して九州の御家人を統括(とうかつ、別々になっているものを一つにまとめること)しました。

また、幕府は、それまでは支配の外にあった国衙領(こくがりょう、国の領地のこと)や荘園の非御家人の武士を動員できる権利を朝廷から与えられるなど、元寇は結果として幕府の支配を強化するという効果も生み出しました。

元寇を機に、幕府の支配権は全国に拡大していきましたが、それとともに幕府内での北条氏の権力はさらに強化されました。なかでも北条氏の嫡流の当主である得宗(とくそう)の勢力が強大になったことで、得宗家の家来である御内人(みうちびと)と従来的一般御家人との対立が目立つようになりました。

元寇の後、北条時宗が弘安7(1284)年に34歳の若さで亡くなると、時宗の子の北条貞時(ほうじょうさだとき)が13歳で9代執権となりましたが、御内人の代表である内管領(うちかんれい)の平頼綱(たいらのよりつな)が、弘安8(1285)年に貞時の外祖父(がいそふ、母方の父のこと)である有力御家人の安達泰盛(あだちやすもり)を滅ぼしました。

この事件は、旧暦11月の霜月(しもつき)に起きたことから「霜月騒動」と呼ばれています。騒動の後には平頼綱が政治の実権を握りましたが、成長した貞時によって正応(しょうおう)6(1293)年に頼綱が滅ぼされると、以後は得宗が絶対的な権力を手に入れるようになり、御内人や北条氏一門が幕政を独占する得宗専制政治がますます強まっていきました。

このように幕府内の権力争いが激しくなる一方で、一般御家人の生活状況は元寇をきっかけにより一層悪化しました。なぜ元寇が御家人の生活の足を引っ張ることになってしまったのでしょうか。

その原因は、鎌倉幕府を支えていた「御恩と奉公」のシステムの崩壊(ほうかい)にありました。

鎌倉時代の武士の社会では、一族の子弟たちに所領を分け与える「分割相続」が一般的でした。一族は宗家(そうけ、別名を本家=ほんけ)の長である惣領(そうりょう)を中心に統率されており、惣領以外の庶子(しよし)とともに、戦時には団結して戦うとともに、平時には氏神(うじがみ)の祭りなどが惣領を中心に行われました。このような制度を「惣領制」といいます。

しかし、分割相続による所領の細分化が、やがて御家人たちに深刻な影響を及ぼすようになりました。なぜなら、細分化によって農業収入は必然的に減少するのに対して、幕府からの様々な命令には「御恩」がある以上、これまでどおり従わなければならないからです。

幕府への義務を果たす「奉公」は出費がかさむため、やがて御家人の多くが借上(かしあげ)や土倉(どそう)といった業者から借金をし始めましたが、借金を返済できなくなった御家人の中には、担保として自らの所領を奪われてしまう者も現われるようになりました。そして、元寇による負担がこうした流れに拍車をかけてしまったのです。

通常の場合、御家人は負担した軍役(ぐんえき)の結果、滅亡した相手方の所領から褒美(ほうび)がもらえることで、それなりの収入を得ることができました。しかし、海を渡ってやって来た元軍が日本国内の所領を持っているわけがありません。従って、九州まで自己負担で遠征して命がけで戦ったにもかかわらず、褒美でもらえる所領がないという、御家人たちにとっては極めて深刻な事態となってしまいました。

困窮(こんきゅう)する御家人の増加に対して、幕府も手をこまねいたわけではありませんでした。執権北条貞時は、永仁5(1297)年に「永仁の徳政令」を出して、御家人に対して所領の売買や質入を禁じるとともに、すでに売却したものについては無償で元の持ち主に返却させることや、御家人が関係する金銭の訴訟を幕府が受け付けないことなどを決めました。要するに、幕府公認による「借金の棒引き」を行ったのです。

それまでの借金がなくなったり、所領が元に戻ったりしたことで、御家人たちはようやく一息つくことができましたが、皮肉なことに、この徳政令が御家人たちをますます追い込んでいくことになりました。なぜそうなったのでしょうか。

借上や土倉たちの立場で考えてみましょう。彼らは御家人たちから利息を集めることや、借金が払えなければ土地を取り上げて、それを基本にさらに商売を拡大することで生計を立てています。それなのに、徳政令が出されたことによって、借金を返してもらえないうえに、正当な取引によって所有した土地を強制的に奪われるはという散々な目にあいました。

一方、御家人たちも徳政令によって一息ついたものの、厳しい財政状況であることに変わりはありません。時が流れると、やがては生活に困るようになり、再び借上や土倉に借金を申し込むこととなります。

しかし、幕府によって一度痛い目にあっている借上や土倉たちは、余程(よほど)のことがない限り今までどおりにお金を貸してはくれません。永仁の徳政令は、結果として御家人たちの経済活動をか

えって阻害(そがい)するという結果をもたらしてしまったのです。

なお、御家人の窮乏化(きゅうぼうか)の原因に分割相続があったことで、鎌倉時代の後期までには惣領が所領のすべてを相続するという「単独相続」が一般的になり、庶子は惣領によって扶養(ふよう、養ってもらふこと)されるようになりました。

また、畿内やその周辺を中心として、武力に訴えて年貢の納入を拒否するなど、荘園領主や幕府に対抗する武士団が多く見られるようになりました。彼らは「悪党」と呼ばれ、その勢力はやがて各地に拡大して、得宗専制政治を強化した幕府を次第に悩ませるようになりました。

3. 両統迭立から建武の新政へ

先述した承久の乱の後に即位された後堀河天皇でしたが、その血統が次代の四条(しじょう)天皇が仁治(にんじ)3(1242)年に12歳の若さで崩御されたことで途絶えると、承久の乱の際に中立であられた土御門上皇の子である後嵯峨天皇が鎌倉幕府によって擁立(ようりつ、もりたてて一定の地位につかせること)されました。

寛元4(1246)年に後嵯峨天皇が子の後深草(ごふかくさ)天皇に譲位されて院政を始められると、やがて後深草天皇の同母弟(どうぼてい、母を同じくする弟のこと)である亀山(かめやま)天皇に譲位させ、さらに亀山天皇の子の世仁(よひと)親王を皇太子にされました。

その後、後嵯峨上皇(後に出家されて法皇とされました)が文永9(1272)年に皇位の継承者を鎌倉幕府に一任される形で崩御されると、幕府は世仁親王を後宇多(ごうた)天皇として即位させる一方で、次の皇太子を後深草天皇の子である熙仁(ひろひと)親王に決めました。

要するに、幕府の調停によって、後深草天皇の血統である持明院統(じみょういんとう)と亀山天皇の血統である大覚寺統(だいかくじとう)とが、まるでキャッチボールのように交代しながら皇位につかれることになったのです。いわゆる「両統迭立(りょうとうてつりつ)」が続いたことによって、両統は幕府に働きかけて自己の血統に有利な地位を得ようとするなど、やがてお互いに激しく争うようになりました。

両統迭立が続くなか、対立状態を解消するとともに、我が国は天皇が国家統治の大権を持つという自明のことを武士たちに示し、政治の実権を幕府から取り戻すことをかねてより念願とされていた大覚寺統の後醍醐(ごだいご)天皇は、北畠親房(きたばたけちかふさ)などの優秀な人材を積極的に登用されました。

ちなみに、天皇の追号は崩御後に決められるものですが、平安時代の醍醐(だいご)天皇による「延喜(えんぎ)の治(ち)」を理想とされた後醍醐天皇は、自らを「後醍醐」と追号されるように生前からお決めになっておられました。ご自身の理想の高さと強い決意の現れと判断すべきかもしれません。

さて、後醍醐天皇が親政を始められた頃の鎌倉幕府は、14代執権の北条高時(ほうじょうたかとき)や内管

領の長崎高資(ながさきたかすけ)による得宗専制政治が行われる一方で、分割相続などによって御家人の窮乏化が進んだことで、幕府に対する反発が大きくなっていました。

これを好機と思われた後醍醐天皇は討幕の計画を二度も進められましたがいずれも失敗され、幕府によって隠岐へと流されました。なお、元亨(げんこう、または「げんきょう」)4(1324)年に起きた一回目の討幕は「正中(しょうちゅう)の変」と呼ばれ、二回目の元弘(げんこう)元(1331)年は「元弘の変」と呼ばれています。

後醍醐天皇が隠岐に流された後、鎌倉幕府は持明院統の光厳(こうごん)天皇を皇位に立てましたが、後醍醐天皇が退位を拒否されたため、お二人の天皇が並立されることになり、これが後の南北朝時代のきっかけとなりました。

さて、後醍醐天皇が京都から追放されてしまわれたものの、子の護良(もりよし、または「もりなが」)親王が父の意志を継ぐべく諸国の兵を募って幕府に抵抗し続けたほか、幕府に対抗する武士団という意味の悪党(あくどう)の一人であった楠木正成(くすのきまさしげ)は、河内の赤阪城や千早城に立てこもって幕府の大軍と戦いました。

正成はわずかな兵で幕府軍に抵抗を続けましたが、その貢献度は絶大でした。なぜなら鎌倉幕府は武家政権ですから、大軍で攻め込みながらわずかな兵の正成の軍勢に勝てないということは、それだけ幕府の威信に傷がつくからです。事実、正成がしぶとく戦っている間に、全国各地で討幕の軍勢が次第に集まってきました。

討幕の軍勢が自然と増加していった大覚寺統の元弘3年/持明院統の正慶(しょうきょう、または「しょうけい」)2(1333)年、後醍醐天皇は隠岐を脱出され、伯耆(ほうき、現在の鳥取県西部)の名和長年(なわながとし)を頼って挙兵されました。

この事態を重く見た幕府は、北条氏と姻戚(いんせき)関係にあった有力御家人を現地へ派遣しましたが、その御家人こそが足利高氏(あしかがたかうじ)でした。

足利高氏は清和源氏の一族であった源義家(みなもとのよしえ)の子孫であり、北条氏の御家人の中でも名門の出身でしたが、鎌倉幕府の威信が地に墮(お)ちた現実を見極めた高氏は、幕府に背いて謀叛(むほん)を起こすことを決断しました。

高氏は他の反幕府勢力を率いて京都へ入り、大覚寺統の元弘3年/持明院統の正慶2(1333)年旧暦5月7日に六波羅探題を滅ぼしました。同じ頃、高氏と同じ源義家の血を引く新田義貞(にったよしさだ)も、上野(こうずけ、現在の群馬県)で討幕の兵を挙げて鎌倉へ向かいました。

義貞は鎌倉を脱出した高氏の子の千寿王(せんじゅおう、後の足利義詮=あしかがよしあきら)と合流して、一緒に鎌倉を攻めました。旧暦5月18日には北条氏最後の執権である第16代の北条守時(ほうじょうもりとき)を滅ぼし、22日には得宗の北条高時や内管領の長崎高資らを自害に追い込んで、源頼朝以来約140年続いた鎌倉幕府はついに滅亡しました。

鎌倉幕府が倒れた後、直ちに京都へ戻られた後醍醐天皇は、光厳天皇のご即位を否定されたほか、摂政や関白を置かれずに、天皇親政のもとですべての土地の所有権の確認に天皇の綸旨(りんじ、側近が出す天皇の命令書のこと)を必要とさせるなど、天皇に権限を集中させた新しい政治を始められました。

しかし、余りに多くの案件が天皇ご自身に殺到したため、現実には中央の機関として行政や司法などの重要な政務をつかさどる記録所(きろくしょ)や、土地に関する訴訟を扱った雑訴決断所(ざっそけつだんしょ)などを置かれました。なお、雑訴決断所は旧幕府の引付(ひきつけ)に相当します。

この他にも、北条氏を滅ぼした勲功(くんこう)に対する恩賞を定めた恩賞方(おんしょうがた)や、軍事や警察をつかさどる武者所(むしゃどころ)が置かれたほか、地方にはこれまでどおり国司(こくし)と守護が並んで置かれました。

また軍事面では、天皇ご自身が軍隊をお持ちでなかったため、子の護良親王を征夷大將軍に任命されたほか、旧幕府の本拠地であった関東や東北には、それぞれ鎌倉將軍府や陸奥將軍府が置かれました。

後醍醐天皇によるこれらの新しい政治は、幕府滅亡の翌年(1334年)に改められた「建武(けんむ)」という年号から「建武の新政」と呼ばれています。

さて、主君に絶対の忠誠を誓うとともに徳のある者が天下を制するとした朱子学(しゅしがく)を熱心に学ばれていた後醍醐天皇にとって、両統迭立によって皇位の継承が不安定になることや、朝廷から政治の実権を「奪っていた」鎌倉幕府の存在は、絶対に許せないものでした。

ご自身が幕府を倒すために何度も討幕の兵を挙げられ、結果として建武の新政が実現できたことは、後醍醐天皇にとっては当然のことであり、このままご自身による親政が永遠に続くとお考えでした。

しかし、後醍醐天皇に味方して幕府を倒すのに協力した武士たちは、勢力が衰えて政治を任せられなくなった幕府の代わりに、他の武士による新しい組織のもとで、これまでどおりの「武士による政治」を続けることを望んでいました。

それなのに、後醍醐天皇は皇族や公家のための政治のみを実行されるだけでなく、これまで守られてきた土地の所有権などの武士の権利がないがしろにされたことで、建武の新政に対する武士たちの不満が次第に高まっていきました。

かつての平家による政権が貴族化した際もそうであったように、いくら武力などで世の中を支配したところで、それが国民の理解を得られなければ、その支配は絶対に長続きできないのです。今回の場合も、当時の国民の代表たる武士の期待に応えられなかった建武の新政には、やがてかげりが見え始め、そんな不穏(ふおん)な空気を察したかのように、後醍醐天皇から「最高の榮譽」を受けたはずの一人の武士が反旗を翻(ひるがえ)しました。

鎌倉幕府を裏切って京都の六波羅探題を滅ぼした足利高氏に対して、後醍醐天皇はその勲功を称えてご自身の諱(いみな、名前のこと。天皇のような身分の高い人は本名で呼ぶことを避ける習慣があったので、忌み名=いみな、という意味も込められていた)である尊治(たかはる)から一字をお与えになって「尊氏」と名乗らせました。

このように、身分の上位の人間が下位の人間に対して自分の名前の一部を与えることを偏諱(へんき)といいます(なお、それまで名乗っていた高氏の「高」は、北条高時から同様に偏諱を受けていました)。天皇が身分の低い者、ましてや「ケガレた者」として虫けらのような存在であった武士に対して偏諱を受けさせるのは空前絶後のことでした。

しかし、尊氏が本当に欲しかったのは征夷大將軍の地位であり、目指していたのは「武士のための政治」を自分が行うことでした。源義家の血を引く武家の名門の子孫である自分自身こそが、北条氏に代わって政治の実権を握るにふさわしいと考えていたのです。

そんな折、建武2(1335)年に北条高時の子の北条時行(ほうじょうときゆき)が関東で中先代(なかせんたい)の乱を起こし、一時期は鎌倉を占領しました。尊氏は乱の鎮圧を口実に、後醍醐天皇の許可を得ないまま鎌倉へ向かって時行軍を追い出すことに成功すると、そのまま鎌倉に留まって独自に恩賞を与え始めるなど、後醍醐天皇から離反する姿勢を明らかにしました。

尊氏の謀反に激怒された後醍醐天皇は、新田義貞に尊氏の追討を命じられましたが、尊氏は義貞軍を打ち破ると、そのまま京都まで攻めのぼりました。しかし、奥州から北畠親房が入京すると朝廷軍は勢いを盛り返し、敗れた尊氏は九州へ落ちのびました。

都落ちした尊氏でしたが、九州で兵力をまとめると、持明院統の光厳上皇から院宣(いんせん、上皇からの命令書のこと)を受け、自らの軍の正当性を確保したうえで、再び京都を目指して東上しました。

尊氏の動きに対して、後醍醐天皇は楠木正成に摂津の湊川(みなとがわ、現在の兵庫県神戸市湊川)で尊氏軍を迎え討つよう命じられましたが、正成は尊氏に敗れて自害しました。いわゆる「湊川の戦い」のことです。

尊氏が再び京都を制すると、後醍醐天皇は比叡山(ひえいざん)に逃れられ、光厳上皇の弟にあたる光明(こうみょう)天皇が新たに即位されたことで、再びお二人の天皇が同時にご在位されることになりました。

後醍醐天皇は京都に幽閉(ゆうへい、閉じ込めて外に出さないこと)された後、尊氏との和睦(わぼく)に応じて、天皇であることを証明する三種の神器を光明天皇に渡されましたが、その後に隙(すき)を見て京都を脱出され、奈良の吉野へ向かわれました。

吉野に到着された後醍醐天皇は、光明天皇に渡された三種の神器は偽物であると宣言されて、新たに朝廷を開かれた後、南朝の延元(えんげん)4年/北朝の暦応(りやくおう、または「れきおう」)2(1339)年に崩御されました。かくして、京都の朝廷(=持明院統)と吉野の朝廷(=大覚寺統)とが並立し、

以後約 60 年にわたって争いを繰り返す「南北朝の動乱」が本格的に始まったのです。

4. 室町幕府の弱体化をもたらした「南北朝」

さて、南朝の延元元年／北朝の建武 3（1336）年に京都を支配した足利尊氏は、2 年後の南朝の延元 3 年／北朝の暦応元（1338）年には北朝の光明天皇から征夷大將軍に任命され、後に「室町幕府」と呼ばれる新しい幕府を京都で開きましたが、その前途には絶えず不安がつきまどっていました。

その理由として、幕府を正当なものと認める後ろ盾となる朝廷が二つに分裂していたことがまず挙げられます。北朝は本来の朝廷の都である京都におわしましたが、本物の三種の神器は南朝に存在するとされたこともあって、尊氏に従った新興勢力の武士の中には、北朝の正当性に疑問符をつける者もいました。

また、武士にとっての本拠地は鎌倉などの東国であるため、尊氏も本当であれば関東で幕府を開きたかったのですが、南朝がいつ北朝に取って代わろうとするか予断を許さない状態が続いたため、やむなく京都で幕府を開いたのです。このため、鎌倉には尊氏に代わる別の組織として鎌倉府が置かれたのですが、関東で鎌倉府に権力が集中したことによって、やがて幕府と対立するようになっていきました。

さらには尊氏自身の資質にも問題がありました。尊氏は根っからの武人であったため、実際の政治は尊氏の弟である足利直義（あしかがただよし）が代行していましたが、その一方で武将にしては珍しく「優しくて良い人」だった尊氏は、功績のあった武将に気前良く領地を与えていました。

しかし、領地が増えた武将がこの後に様々な権利を得ることによって守護大名と化したことによって、こちらも幕府のことを聞かなくなっていくのです。

加えて、南北朝の動乱が 50 年以上も続いてしまった大きな原因も、実は尊氏の「優しさ」にありました。尊氏は自身に偏諱を賜（たまわ）られた後醍醐天皇に対してどうしても非情になれず、隠岐などに追放して政治生命を断つことが出来なかったゆえに、天皇に吉野に逃げられて南朝を開かれてしまったからです。

尊氏の優しさは、悪く言えば「優柔不断」でもありました。当初は弟の直義と二人三脚で順調だった幕府政治も、やがて武断派の尊氏の執事（しつじ）の高師直（こうのもろなお）らの勢力と、文治派の直義らの勢力との間が不和となり、優柔不断な尊氏には、彼らをまとめることができませんでした。

そんな折、尊氏の実子でありながら父に嫌われ、直義の養子となっていた足利直冬（あしかがただふゆ）が尊氏派によって九州へ追われると、地元の勢力を味方につけて尊氏に反旗を翻しました。

九州の激変ぶりに驚いた尊氏が、南朝の正平（しょうへい）5 年／北朝の観応（かんのう）元（1350）年に直冬を討伐すべく自らが遠征すると、その隙について直義が南朝に降伏しました。南朝はこの頃までに尊氏派の武将によって吉野を追われて賀名生（あのを、現在の奈良県五條市）まで後退していたのですが、

直義の降伏で息を吹き返すことになりました。

直義は反尊氏派の勢力を引き連れて、尊氏の子の義詮(よしあきら)が守っていた京都へ攻め込み、敗れた義詮は尊氏を頼って備前(びぜん、現在の岡山県)へと落ち延びました。室町幕府が成立してから10年以上も経っていながら、天下は再び大きく乱れ始めたのです。なお、これ以降の幕府の内乱は「観応の擾乱(じょうらん)」と呼ばれています。

直義の謀反を義詮から聞いた尊氏は激怒しましたが、持ち前の優しさが仇となって、直義と正面切って対決することが出来ませんでした。そうしている間にも直義派は着々と勢力を固め、尊氏が覚悟を決めて直義と戦った際には、戦上手のはずだった尊氏が大敗北を喫してしまいました。

その後、一旦は和議が成立したものの、再び尊氏が直義を東西から挟み撃ちで倒そうとすると、尊氏の計略に気づいた直義は、京都を脱出して北陸伝いに鎌倉へ攻め込もうとしました。

武家政権発祥の地である鎌倉を奪われては尊氏の立場がありません。尊氏は直ちに直義軍を追撃しようとしたが、自分が遠征している間に直義派となった南朝に京都を制圧されて尊氏追討の綸旨(りんじ)を出されれば、自分が朝敵となって滅亡への道を歩んでしまうのは火を見るより明らかでした。

進退窮(きわ)まった尊氏は、北朝から征夷大將軍に任じられているにもかかわらず、それまで敵対していた南朝と手を結んで、自分の味方につけるしか手段がありませんでした。

以前には後醍醐天皇、今回は直義といった、自分に敵対する勢力を政治的に抹殺することなく「生かして」しまったことで、尊氏は多くの血を流したうえにやっとの思いで構築した政治のシステムを、自らの手で破壊せざるを得なかったのです。

自分が降伏することで北朝の天皇や皇太子が廃位される代わりに、これまでの幕府の既得権を南朝が追認するという条件で和睦した尊氏は、南朝から直義追討の綸旨を得て、ようやく遠征へと出かけましたが、これは南朝による罠(わな)でした。

南朝は尊氏が遠征した隙について、北畠親房の指揮によって京都へ攻め込み、幕府予備軍であった義詮の軍勢を敗走させると、勢いに乗った南朝は、北朝の三人の上皇と皇太子を、自分たちが追われていた賀名生へと移しました。

かくして後醍醐天皇が吉野朝廷を開いて以来、後醍醐天皇の子の後村上(ごむらかみ)天皇によって、16年ぶりに南朝が京都を支配するようになったのです。時に南朝の正平7年／北朝の観応3(1352)年旧暦閏(うるう)2月のことでした。

しかし、南朝の天下は長続きしませんでした。体勢を立て直した義詮が京都へ再び攻め込んだからです。南朝はしばらくの間は持ちこたえたものの、同年旧暦5月には追い落とされ、後村上天皇や親房は再び賀名生へと逃れていきました。

ちなみにこの後、南朝は一度も京都を回復しないまま、南朝の元中(げんちゅう)9年／北朝の明德(めいどく)3(1392)年に北朝との合一(ごういつ)を迎えることとなります。

なお、南朝と義詮とが争っている間に、尊氏と戦って敗れた直義が南朝の正平7年／北朝の観応3(1352)年旧暦2月に急死しました。尊氏による毒殺説もありますが、直義を討つために南朝と和睦するなど、幕府政治の根幹を揺るがした後となつては、すべてが手遅れでした。

さて、一時は南朝に京都を追われたものの回復に成功した義詮でしたが、ここで大きな問題が発生しました。尊氏の征夷大將軍を認める北朝の天皇になるべき直系の皇族が存在しないのです。

南朝の勢力が賀名生へ逃げ帰った後も、北朝の三人の上皇や皇太子は連れ去られたままであり、天皇であることを証明する三種の神器も南朝に奪われたままでした。

義詮は仕方なく、京都に残っておられた光厳上皇の第二皇子の弥仁(いやひと)親王を、神器も後見役となる上皇の存在もなしで無理やり後光厳(ごこうごん)天皇として即位させましたが、天皇の正当性としては神器を所有する南朝に遠く及ばず、北朝の権威が著しく低下するという悪影響をもたらしてしまいました。

ちなみに、こうした北朝の権威の低下が、後の「ある足利將軍」の「大きな野望」へとつながっていくこととなります。

なお、尊氏は翌年の南朝の正平8年／北朝の文和(ぶんわ、または「ぶんわ」)2(1353)年によく京都へと戻りましたが、その後も直冬の攻撃を受けるなど混乱が続いた後、自分の代で平和を達成できぬまま、南朝の正平13年／北朝の延文(えんぶん)3(1358)年に54歳で死去しました。

一般的には「室町幕府最初の將軍」としてその名が知られる足利尊氏ですが、その生涯は戦いの日々明け暮れており、政治家としては物足りない印象しか受けませんが、その大きな理由は、先述した「尊氏の優柔不断」にありました。

「優しい人」「気前の良い人」といえば人間が本来持つべき性格であるとされ、私たち一般人の間では好かれる傾向にありますが、政治の世界においてはマイナスでしかありません。なぜなら、尊氏の「優しさ」は政敵を抹殺することをためらわすことで「優柔不断」となり、結果として幕府の将来に暗雲をもたらしてしまったからです。

尊氏が亡くなった南朝の正平13年／北朝の延文3(1358)年において、幕府の勢力が及んだ地域は鎌倉と京都が目立つのみであり、中国地方は足利直冬が、九州は後醍醐天皇の子である懐良(かねよし、または「かねなが」)親王が実質的な支配を固めていました。

しかも、三種の神器を所有している南朝こそが正当であるとみなされたことで、尊氏の征夷大將軍を保証する北朝の権威が低くなり、それと連動して足利將軍の地位も低く見られる傾向にありまし

た。

さらには、絶対的なカリスマ性を持っていた源頼朝と比較して、源氏の名門出身ではあったものの将軍として君臨するにはただでさえ器量不足だった尊氏が他の勢力に「気前良く」領土を与えたことで、やがては守護大名が幕府のことを聞かなくなるという結果をもたらし、足利家そのものの地位をさらに低下させてしまいました。

こうした尊氏のいわゆる「負の遺産」をどう処理すればよいのかという大きな課題が、室町幕府代々の将軍を悩ませるとともに、我が国の歴史にも大きな影響を及ぼしていくのです。(続く)

- 主要参考文献：「逆説の日本史 5 中世動乱編」(著者：井沢元彦 出版：小学館)
「逆説の日本史 6 中世神風編」(著者：井沢元彦 出版：小学館)
「逆説の日本史 7 中世王権編」(著者：井沢元彦 出版：小学館)
「新版 新しい歴史教科書 中学社会」(出版：自由社)
「詳説日本史 B」(出版：山川出版社)
「日本人の誇りを伝える最新日本史」(出版：明成社)
「年代ごとに読める歴史事典 最新日本史教授資料」(出版：明成社)

黒田裕樹の歴史講座

<http://rocky96.blog10.fc2.com/>

黒田裕樹の歴史講座+日本史道場+東京歴史塾

https://www.theaterspec.com/seminar_school/asakatsu-rekishikouza/

※黒田裕樹の「百万人の歴史講座」でダウンロードできる全ての pdf (テキストファイル) は、黒田裕樹が著作権を持つ著作物であり、またその販売権は「南木倶楽部全国」を主催する南木隆治にあります。これらのファイルを第三者が再販売・不特定多数に対して再配布することはできません。